環境問題を実体験 解決へメッセージを発信！

CASE 8

「モンゴル」と「水俣病」。一見、何の関連もないような２つの言葉ですが、
商学部には、これらを結びつけて考える授業があります。
今、モンゴルでは急速な工業化が進んでおり、生活が豊かになる一方で、
公害による被害が起こっています。かつての日本のように
繰り返されつつある悲劇を目の前にして、学生たちに何ができるのでしょうか。

江部奈々美／落合　徹（商学部 ２年）
Nanami Ebe/Tohru Ochiai

モンゴルに重なるデジャヴュ

森永由紀教授が担当する特別テーマ実践科目では、水俣病の問題と並行しながら、モンゴルの公害問題や環境問題について研究しています。日本で１９５６年に発生した水俣病は大変な悲劇を生み、その救済が現在も続いているのは周知の事実です。この授業の最終目標は、日本で暮らす人々や、モンゴルで暮らす人々に向けて、「水俣病を風化させてはいけない」、「水俣病の悲劇を繰り返さないでほしい」というメッセージを強く発信していくことです。

ところで、モンゴルと言えば広大な草原、青い空、のどかな遊牧生活をイメージする人が多いでしょうか。もしくは朝青龍のような力士でしょうか。現在のモンゴルは、そうした自由で素朴なイメージとは異なり、経済政策の転換から急速に都市化が進んでいます。

人々は、１９９０年代の民主化や自然災害で家畜を失ったことで、移住生活から定住生活への転換を余儀なくされました。そのため「ゲル」と呼ばれるテントのようなものを建てて生活する伝統的な暮らしは減りつつあります。都市で仕事をしながら暮らす人々が増えているのです。

都市化と工業化が進む今日のモンゴルでは、１９５０～６０年代の日本で起こった大気汚染や水質汚染などの環境汚染が社会的な問題になっています。日本人とモンゴル人は同じ起源を持つ民族、言うなれば親戚のようなもので、それは彼らの顔が私たち日本人にそっくりなのを見ても頷けるでしょう。私たちと同じルーツを持つ彼らが今、日本の悲劇の歴史を繰り返そうとしているのです。

力は弱くても情報は発信できる

２００９年７月、この特別テーマ実践科目の授業に、モンゴル国立大学教授のチムゲさん、同大学１年生のエネレルさんを招きました。この日は、参加している学生にとって、自分たちのメッセージを対外的に発信できる、その最初の勝負の日です。

これまで学生たちは、水俣病の知識を体系的に学ぶとともに、カナダをはじめさまざまな国で起きた公害事件のケーススタディの研究を通じて、「公害発生から社会的に認知され、解決に至るまでに共通するパターンを探し出す」という作業をしてきました。

これがわかれば、「モンゴルでもこんな現象が起きていませんか?」と問うことができるという訳です。さらに、発生メカニズム、症状、企業と行政の対応など、さまざまな側面から水俣病を分析し、その悲惨さを訴える術を検討しました。

この間、森永教授は「私たちは、わずか十数名の学生と教員だけ。一国の公害を食い止めるにはあまりにも弱小な団体です。しかし、モンゴルが自ら解決の糸口を見つけるために役立つ情報ならば発信できるはず」と学生たちを鼓舞してきました。

現地の人の生の声を前に

チムゲさんとエネレルさんに対するプレゼンテーションは、終始緊張した雰囲気の中で進みました。声を上げる手段を持たない被害者をサポートできる人にメッセージを届けるために、実際にモンゴルに暮らすこの２人に聞いていただくことになったのです。

こうした観点から将来、国を背負って立つ学生に向けて発信することを意識したメッセージ「公害の犠牲者を、これ以上出してはいけない」を盛り込んだプレゼンテーションを行いました。発信するだけで終わっては意味がない。大事なことは、受信する側の心に響くかどうかです。

興味深い話に耳を傾ける学生たち

モンゴルの現状を伝えるチムゲさん

（左から）エネレルさん、チムゲさん、森永教授による意見交換

学生たちは言語が異なる彼女らに、たどたどしくも懸命に水俣病の教訓を伝えながらコミュニケーションを重ねます。森永教授は「この地道な作業こそ、相手と向き合うことにつながる」と言います。

真摯に耳を傾けていたチムゲさんは「森永先生と有意義な提案をしてくださった皆さんに、感謝を述べたいと思います。モンゴルでは今、鉱山の開発が進み、以前の日本と似たような公害の事例が確認されていますので、大変興味深いプレゼンテーションでした」と言われました。その後はチムゲさんから、モンゴルで実際に起きた公害問題の事例の紹介と学生からの質問に対する回答があり、今後のさらなる学習に向けた建設的な議論が行われました。

自分の周りを変えていく

夏休みに学生は、２泊３日で水俣市に足を運びます。公害の知識を深めるとともに、現在の水俣を知るための活動です。その際、各学生は「水俣の自然環境を実際に体感する」、「水俣病の加害者であるチッソ株式会社を訪問する」、「水俣市が優れた環境配慮の街になるまでの、歩みとその活動を探る」の３つのテーマから選択して研究を行います。

実際に現場で見て、聞いて、考えることで、環境問題の複雑さや解決の難しさを体験的に学ぶ＝「環境問題を実体験する」ことが、メッセージに真実味を持たせる鍵になると考えているのです。

「少しでも、モンゴルの公害の被害を食い止めたい。たとえ１％でも寄与したい」と、この授業への思いを語る学生の遠藤龍太さんは、続けて「水俣病と聞くと暗いイメージを持っている人が多い。初めは私も重たい内容の授業かと思った。しかし、悲劇を繰り返さないよう、私たちは同じ方向を向いて学んでいる。そう考えると、この授業での取り組みは明るいものだと言えると思う」と話します。

「いかに自分が周りを変えていけるのか」そのキーワードの下、言葉の壁すら越えて、困難な問題をかかえる環境問題の現場を変えていこうとする学生たちのチャレンジが求められています。

VOICE OF STUDENTS

明治大学商学部だからこそ出会えるチャンスがある。

私はこの授業を通して、主体的に動く重要性、プレゼンテーションの難しさを痛感し、今後自分を高めていく上で、とてもいい刺激になりました。同時に、商学部の「良さ」を再認識しました。それは、実践的な活動を通して学べる場があるということです。高校生の皆さん、明治大学商学部だからこそ出会えるチャンスを活かして、自分をステップアップさせましょう。

北出洋太（商学部 1年）